

日本中世における禅僧の講義と室町文化

原 田 正 俊

A Zen monk's lecture and Muromachi culture during Japanese medieval times

HARADA Masatoshi

In medieval society in Japan, Zen monks played an important role in cultural interactions in East Asia. In the late 13th to 14th centuries, there were Five Great Zen Temples both in Kyoto and Kamakura, and the activities of Zen monks were expanded. The Five Great Zen Temples house a large amount of books from China. I chose the books housed in Tofuku-ji Temple and analyzed their contents. In addition, I also chose Shushin Gidoh as the topic of my research and considered the greatness of the influence he had on the policymakers, such as people surrounding the Kamakura shoguns and Ashikaga shoguns by specifying the books he read and his lecture activities. Furthermore, I clarified the meanings that the relationship between Buddhism and Confucianism preached by Zen monks had on Japanese society, and the influence of the cultures of the continent including Zen sects on Muromachi culture through noh plays.

キーワード：禅宗、禅僧の講義、仏教と儒教、能、室町文化

はじめに

日本の中世社会において中国・朝鮮半島との文化交渉において大きな役割を果たしたのは仏教僧の活動である。平安時代末から鎌倉時代初頭においては天台僧が盛んに大陸に渡り、次いでは禅僧の往来が増加していった。鎌倉時代の後期になると蘭溪道隆・無学祖元など渡来僧が陸続と日本に招かれ大陸との交渉は活発さを増していく。

こうしたなか、大陸の仏教の動向が紹介されることにより、禅宗が日本社会に積極的に導入され、日本の寺社勢力が再編されていった¹⁾。同時に禅僧たちによって大陸文化が様々な形で紹介され日本社会における学問・芸能にも影響を与えていった。日本の中世においては禅僧が大陸の文化を紹介し、文化交渉の担い手であった。

1) 原田正俊『日本中世の禅宗と社会』吉川弘文館、1998年。

これまでの研究においても禅僧による大陸の新しい儒学研究の紹介²⁾、中世儒学史における禅僧のもつ存在の大きさは注目されてきている。儒学については古代以来の博士家を中心とした学問の担い手が禅僧の手に移り、近世初頭には禅僧出身、禅寺で修学した儒学者の自立へとつながっていくといった流れで把握される。こうした研究史の上では中世はあくまで過渡期であり、この時代特有の文化や思想の状況が説明されているとはいえないのである。

文学においても古代の平安貴族による漢文学の享受から、禅僧による最新の漢詩文の紹介と制作、五山文学といわれる詩文や四六駢儷文が漢文学の一時代を形成していった。また中世においては漢詩と和歌が同時に朗詠される和漢連句会³⁾なども盛況をみせ、公家文化と大陸に由来する禅文化が協調して展開していった。

このように禅僧たちがもたらした大陸文化の内容は日本の中世文化の形成に大きな影響力を持つものであった。禅僧のこうした文化的な影響力の大きさについてはなんとといっても芳賀幸四郎氏⁴⁾の先駆的な研究がある。その後、歴史学的な立場からの研究は多くはなく、禅宗史の分野では玉村竹二氏⁵⁾の研究によって五山の歴史的な位置付けと文学の関係が解明されていった。

また、禅僧の活発な学芸に関する活動については、今泉淑夫氏⁶⁾によって室町時代後期の桃源瑞仙や彭叔守仙の活動が明らかにされている。文学の側からは朝倉尚氏⁷⁾の研究が注目され、禅僧の詩文集・抄物といった作品と講釈の全体像を追求している。しかし、文学としての考察が主となり、社会的な広がり、文化交渉の在り方としてはさらなる考察も必要と考えられる。

本稿では、こうした禅僧による大陸文化導入の具体的活動を跡づけ、日本中世における東アジアの文化交渉の在り方を再検討していきたい。従来の研究は、個々の禅僧の往来や儒学・五山文学を中心に論じられてきたが、大陸における禅宗の教義や寺院の在り方がどのような活動で紹介され、日本社会で理解され定着・浸透していくのかを考察していきたい。また、禅宗のこうした活動が中世の文化にどのような影響を及ぼしたのか、どういった形で日本社会に受容されていくのかを明らかにしていきたい。本稿では東アジアにおける文化交渉の在り方をより具体的に再検討していくことを目的とする。

また、大陸における知の体系が如何なる過程を経て日本社会に紹介され、浸透していくのか、五山禅僧の活動を通して、こうした東アジアの知の伝達の組織的な在り方を明らかにしていきたい。

一 禅院の蔵書

禅僧が大陸との交渉のなかで膨大な典籍を将来したことは周知のことであるが、五山をはじめ、その

2) 足利衍述『鎌倉室町時代の儒学』有明書房、1970年、初出は1932年、和島芳男『日本宋学史の研究 増補版』吉川弘文館、1988年、市川本太郎『日本儒学史』3中世篇、汲古書院、1992年。

3) 小川剛生『二条良基研究』笠間書院、2005年。

4) 芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』思文閣出版、1978年、初出は1956年。

5) 玉村竹二『五山文学』至文堂、1966年。

6) 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』春秋社、1993年、同『彭叔守仙禅師』春秋社企画出版部、2005年。

7) 朝倉尚『禅林の文学』清文堂、2004年。

塔頭には多数の典籍が蓄積されていった。東福寺には「普門院経論章疏語録儒書等目録」⁸⁾（以下「目録」と略す）が現存し、中世五山の蔵書の様相をみる上で注目される。

東福寺は建仁寺に次いで鎌倉時代に京都に創建された禅宗寺院であり、当初は天台真言を兼修したが、開山である円爾（1202～80）の力によって本格的な臨済禅の寺院として展開していく。円爾は聖一国師の名でも知られ、鎌倉時代において栄西や渡来僧である蘭溪道隆などとならび禅宗の発展において重要な働きをした人物である。円爾は天台宗寺門派の園城寺で出家後、栄西の高弟栄朝のもとで禅を学び、1235年（嘉禎元）入宋して径山の無準師範のもとでその法を嗣ぎ、1241年（仁治2）帰国した。摂政関白をつとめ当時の政界の実力者でもあった九条道家の招請を受け、東福寺の開山となった。東福寺は後に五山に列し、臨済宗聖一派の本山となる。

この「目録」は、東福寺開山である円爾が将来した典籍をもとにその後の蒐集本もあわせて東福寺内の普門院に収蔵されていた書籍の全容である。蔵書を整理し「目録」を書いたのは円爾の弟子、蔵山順空の法を嗣いだ大道一以（1292～1370）とされている。この「目録」は14世紀の東福寺が所蔵した典籍の全容をよく示してくれるものであるといえよう⁹⁾。

書目は『法華経』『大蔵経目録』『首楞嚴経』『円覚経』『宝積経』『金剛経』『涅槃経』など禅宗が主に用いる經典から始まり、諸経の注釈書・論疏、『盂蘭盆経疏』『施食通覧』など年中行事・儀式に使用のものがある。

さらに禅宗祖師の修行の経歴（行録）・言行をもとに伝法の歴史を記した燈史といわれる『景德伝燈録』『天聖広燈録』『建中靖国続燈録』『嘉泰普燈録』『聯燈会要』『五燈会元』『禅林僧宝伝』『大光明蔵』などがならび、禅宗の法系を記す『宗派図』がある。これらは禅宗が他の宗派との差異を示す重要な史書でもある。

禅僧の語録としては、『雪竇明覚語録』『黄龍四家語録』『宏智録』等からはじまり、日本でよく読まれた『仏果園悟禅師語録』『碧巖録』『大慧普覚禅師語録』などもみえる。禅宗にとって祖師の語録は經典よりも重視され主要な禅僧の語録は必携のものであった。こうした燈史のなかの禅僧の逸話や語録のなかの一節が公案として用いられた。

また、仏教と儒教の関係性を論ずる書物も注目される。中国において仏教はしばしば弾圧に遭い、儒教・道教との関係をどのように理論付けるかは重要な課題であった。日本へもこうした儒仏・道仏論争を経てなされた書物も将来された。『仏法大明録』『鐔津文集』などは、禅宗の教えを論じると共に仏教と儒教の一致を説くもので注目される。『仏法大明録』は、宋末の圭堂居士の著で、1229年（紹定2）の序をもつ。『鐔津文集』は『輔教編』を含むことでこの種の書物の代表格である¹⁰⁾。『輔教編』は明教大師契崇の著で1053年（皇祐5）頃に完成し、仁宗皇帝に奏上して入蔵を働きかけ、大蔵経に入れられた。儒教と仏教ともに治に帰すとして、治世・治心をなすものとして、儒仏の一致を説くとともに、儒

8) 『大日本古文書 東福寺文書之一』28号

9) 今枝愛真「『普門院蔵書目録』と『元亨釈書』最古の写本—大道一以の筆蹟をめぐって—」（『田山方南先生華甲記念論集』田山方南先生華甲記念会刊、1963年）。

10) 荒木見悟『輔教編』（筑摩書房、1981年）解説。

教は一世のことを説くが仏教は三世を説くとしてその優位も示している。

「目録」のなかには禅宗のみならず諸宗の典籍も含まれるが、禅宗と諸宗の一致を説いた『宗鏡録』や華嚴との一致を論じた『禅源諸詮集都序』などもみえる。『宗鏡録』は宋の永明延寿の著作で、961年（建隆2）成立、100巻という大部の書で法相・三論・華嚴・天台を折衷して禅宗と融合させている。

円爾は帰国に際し、師の無準師範より楊岐の法衣と『大明録』を与えられ帰国している¹¹⁾。南宋の仏教界において禅宗と儒教の融合は一つの思潮であり、日本で禅宗を流布させるためにも重要な書物として選ばれたことは注目される。また、円爾は1245年（寛元3）後嵯峨天皇に『宗鏡録』を献上し、翌年には近衛兼経の命で、『宗鏡録』を諸宗高僧の面前で講じており¹²⁾、禅宗を中心に諸宗の一致を説くこの書がいちはやく日本でも注目されたことがわかる。

「目録」のなかには禅宗寺院の日常規則・儀式を定めた『禅苑清規』も含まれ、日本における禅宗寺院が本格的な大陸仏教の導入を図っていたこともわかる。事実、円爾は東福寺の運営にあたっては自身が体験した径山万寿寺の無準師範のもとでの清規を東福寺に適用するとしている。円爾は京都の公家社会で帰依を受けるとともに北条時頼の帰依も受け、鎌倉の禅宗寺院の規矩を正すことにも尽力している¹³⁾。

この他、『宋高僧伝』といった中国仏教全体の僧伝、『大宋僧史略』『仏法繫年録』『釈門正統』といった仏教史を論ずる書物もあり、天竺・震旦の仏教全体を把握する手だてとなった。

また、この「目録」中で注目されるのは『大学』『中庸』『論語』『孟子』『周易』『毛詩』『尚書』『春秋』『礼記』さらに『莊子』などの書物の充実であり、『晦庵集注孟子』『晦庵大学』など朱子の注による新しい儒教の典籍も将来されている。これらについては日本儒学史研究のなかでも注目されている¹⁴⁾。

蔵書の管理については、普門院には円爾の代に経蔵が作られ、1280年（弘安3）、円爾は東福寺規式を定め、聖教・法衣など普門院に安置した物を他所に出すことを禁じている¹⁵⁾。また、自筆の譲り状を以て普門院院主職に弟子の正堂俊頭を任じ、後世、器量の仁を任命して、径山の仏法を興隆するよう命じている¹⁶⁾。

こうした寺院の蔵書は比叡山延暦寺、南都東大寺・興福寺など権門寺社にも存在した。しかし鎌倉時代において最新の大陸の典籍を大規模に所蔵したのは東福寺であり、これより先では東福寺の北に位置し、俊苧が開いた泉涌寺がある¹⁷⁾。

いずれにしても、これ以後、禅寺の大陸からの典籍の将来は活発であり、京都鎌倉の主要な禅寺・塔頭には膨大な書物が所蔵され、禅僧たちの修学と布教に活用された。

11) 『聖一国師年譜』仁治2年(1241)条(『大日本仏教全書』95)。

12) 『聖一国師年譜』寛元3(1245)・4年条。

13) 『大日本古文書 東福寺文書之1』22号円爾東福寺規式、東福寺と円爾については、原田正俊「九条道家の東福寺と円爾」(『季刊日本思想史』68号、2006年)参照。

14) 足利衍述『鎌倉室町時代の儒教』45頁、有明書房、1970年初版は1932年。

15) 『大日本古文書 東福寺文書之一』第20号円爾普門院造作院領等記録、同16号円爾普門院四至榜示置文。

16) 同上15号円爾普門院院主職譲状。

17) 註13拙稿。

それではこうした、大陸からの知識の体系はどのように日本社会に展開されていったのであろうか、次章ではこの問題を検討していきたい。

二 禅僧の説法・講義

禅僧たちは大陸の仏教の動向を日本で紹介していくが、彼らはしばしば上堂説法という形で祖師の語録や燈史に出てくる禅僧たちの逸話・問答を交えて禅の教えを説いた。禅宗伽藍の中樞に位置する法堂の須弥壇上で住持をはじめ、僧たちが法を説くのであった。大陸の寺院で行われた四節の上堂説法、臨時の上堂など、日本の禅僧の語録のなかにも数多くの上堂説法の記録があり、また、檀越の依頼を受けて故人の追善のための上堂説法もしばしば行われた。

また、禅宗寺院内で僧侶が昇進していくにあたっては、^{ひんぼつ}乗払^{ひんぼつ}といって住持に代わって衆僧からの問答を受け付けそれに答えるという儀式が重要視された。禅僧たちが日頃の自らの修行の成果を語録・燈史の言葉に依拠しながら見解を提示する儀式であった。乗払の儀式は坐禅による悟りへの到達を計るものであったが、現実には如何に語録・燈史の語をうまく散りばめ問答に及第していくかが課題であり、自然と禅籍の学習が求められていた。

日本では古代以来、南都六宗や天台宗においては論義会といった法会が重視され、興福寺の維摩会、宮中の御齋会、薬師寺の最勝会といった南京三会、円宗寺の法華会・最勝会、法勝寺の大乗会といった北京三会があった。こうした論義会は、僧侶たちが日頃の研鑽の成果を戦わせる場であると同時に、昇進のための重要な儀式であった。論議では經典の内容、教義の問答が繰り広げられ、聴聞の人々は法相や天台の教学を享受する場ともなっていた。

13世紀末以降、顕密寺院と肩を並べて台頭していく禅宗寺院においても顕教の論義会と同様、乗払の問答は教学の振興の基であり、僧俗を含め教義を広める場でもあった。外護者である幕府関係者や公家たちにとっても乗払の場は禅問答を生で聞く機会でもあった。

禅僧たちはこの他、講義、談義という形で經典、禅籍や外典である儒教関係の典籍を説く場合もあり、中世後期に盛んとなる天台宗の談義とともに仏法の流布には重要な役割を持った。

禅僧たちがどのように禅思想を展開し、大陸の仏法をはじめとした知の体系を日本で展開したのかは東アジアにおける文化交渉の在り方としても注目される所であり、本章では禅僧による説法・講義の実際を検討していきたい。

それにあたって、先にみた東福寺の「目録」が整備されたのと同時期、14世紀の代表的な禅僧である義堂周信（1325～88）を中心に検討していく。義堂に注目するのは、彼が五山禅林の主流となった夢窓疎石の門派（夢窓派）の重要人物であり、学僧としての令名も高く、鎌倉・京都を股にかけて活動したことであった。義堂には「空華集」という詩文集があるとともに、『空華日用工夫略集』（以下『日工集』と略す）¹⁸⁾ という日記もあり、詩文集の背景にある行動の実際も追うことができる。

18) 『空華日用工夫略集』については蔭木英雄氏による訓註（思文閣出版、1982年）があり、これを参照し、人名などの考証については改めたものもある。「空華集」は『五山文学全集』第2巻所収。

また、義堂は鎌倉の関東公方足利基氏・氏満、京都では将軍足利義満をはじめ管領斯波義将など有力守護大名の帰依を受け、同門の春屋妙葩などとともに、隆盛期の五山禅宗と国家権力を考える上でも重要な立場にあった。以下、『日工集』を中心に義堂が講じた典籍、彼が依拠した書物、その思想と影響を明らかにしていく。

『日工集』は1325年（正中2）から1388年（嘉慶2）までの記事があるが、義堂自身が書いた日録、行状をもとに弟子たちの手も入っており、略集という名が示すようにもとあった大部の日記形式の『日工集』から抄出して現存の形態にまとめられたことがわかる。義堂自身が自らの戒めのために記したと同時に弟子たちに遺し、師としての配慮もうかがわせるものであり、義堂の思想的立場、禅僧としての生き方を示す書ともなっている。

また、義堂と交流する人々の談や義堂の読書の書目、質問などに答える際の引用文献なども記され、この時代の禅僧の思想・教養・知識の実態を見る上でも有益である。禅僧である義堂は様々な大陸からの典籍を縦横無尽に使用しており、中世に生きる僧侶が大陸文化をどのように受容し日本社会に紹介していったかの様相を具体的に示してくれるのである。

義堂の講義・読書・対談などの様相を『日工集』から抜き出すと表1のようになる。活動の中に出てくる書目を記し、活動内容、講義や会話の相手、書目の分類を示した。また、義堂の活動以外も彼がその場に同席したもの、伝聞記事もあわせて掲載した。数も多いことから、以下その特色を適宜取り上げ検討していく。尚、文末の（番号）は表中の冒頭番号と対応する。

1346年（貞和2）、義堂は宋元二代の禅僧の五言七言絶句数千首をまとめ「貞和集」を完成させた（1）。彼は青年期に入元を志すが生来病弱の故、これを断念していたが、こうした若い時からの修学によって彼自身が『日工集』のなかに記すように、中国でも詩文の才能を高く評価されるほどの実力をつけていた¹⁹⁾。

1359年（延文2）35歳の時、夢窓派の総帥であった春屋妙葩の命で、関東の禅林興隆のため、同門の僧たち10名で鎌倉に入った。彼らは建長寺・円覚寺に掛搭（入門）し、義堂は円覚寺に所属した。鎌倉では寿福寺や建長寺で『円覚経序』や清規の講義を聞いている（3・4）。また東福寺普門院「目録」にもあった「仏法纂年録」（2）を読んでおり、この書物の詳細はわからないものの、上竺教寺の講経首座慧鑑の編で宋の太祖建隆元年（960）から孝宗淳熙16年（1189）までの記事があり、10巻本であることがわかる。東福寺蔵本と同様の書物が鎌倉にも流布していた。

1368年（応安元）関東の武士、愛甲三品夫人の葬儀を行うが、この夫人は夢窓疎石に参禅して常日頃、「即心即仏」の公案をもとに研鑽していたという²⁰⁾。鎌倉における女性も含めた禅宗の浸透の度合いを見ることができる。事実、13世紀末の渡来僧のもとにも女性の参禅者は多く、無学祖元のもとでは、無外如大という後世まで尼僧の鑑と讃えられる尼僧も成長した。この他、大休正念などのもとにも尼の弟子が生まれ、鎌倉には後の尼五山に連なる尼寺が次々と建立されていった²¹⁾。

19) 『日工集』 永和2年4月20日条。

20) 『日工集』 応安元年8月5日条。

21) 原田正俊「女人と禅宗」（西口順子編『中世を考える 女人と仏』吉川弘文館、1997年）、同「禅宗と女性」（『国文

義堂は鎌倉において、関東公方足利基氏をはじめ鎌倉府要人の帰依を受け、相模善福寺（諸山）の住持を経て、円覚寺黄梅院塔主となった。関東における夢窓派の統括者としての地位であった。

足利基氏が没すると鎌倉五山の僧を手配してその葬儀取り仕切り²²⁾、基氏の塔所となる瑞泉寺の住持となった。さらに保寿寺の住持を兼帯、関東管領上杉能憲が建てた報恩寺の住持として同寺の整備を進めた。1378年（永和4）、上杉能憲の葬儀と収骨も義堂が執りおこなっている²³⁾。

この間、義堂は鎌倉において瑞泉寺などの衆僧をはじめ建長寺、円覚寺僧なども含め数多くの僧侶たちに『皎然詩（雪峰義存）』『三体詩法』『大慧書（大慧宗杲）』『大慧普覚禅師普説』『東山集（雪峰慧空）』『孟蘭盆経疏』『円覚経』『貞観政要』『夢窓国師年譜』『輔教編（契嵩）』『無文文集』『林間録（覚範慧洪）』『羅湖野録（仲温暎瑩）』『坐禅儀』（5・8・9・12・15・16・27・33・38・39・40・45・52・53・58・62）を講じている。

その内容は詩文にかかわるもの、宋代の高僧、大慧宗杲をはじめとした人物の語録や宋代に編纂された高僧の言行録、禅宗所用の経典、禅と儒教を論じたもの、清規などが講じられていることがわかる。

僧侶はもとより、俗人からの講義依頼や質問に答えることも多く、上杉朝房は『楞嚴経』第二の一節を講ずることを依頼し、殺生や飲酒を行ってよいかと質問し（7）、別の日、義堂は朝房に為政者として天下仏法の護持をなす事を要請している²⁴⁾。

上杉憲春は易の嘉遯貞吉について質問をし（18）、二階堂行春らは禅院における紅槽について問うている²⁵⁾。小田居士（孝朝カ）は詩学について、馬場居士は百丈について、依田居士は金剛王について質問している（35・37）。町野居士の質問に対しては『仏祖統紀』をもとに答えている（49）。上杉憲春には明教大師契嵩の事績を説明して、『鐔津集』を講じており（62）、禅の立場から儒教を包含した教えを実際に為政者に説いていることは注目される。

関東管領、上杉能憲はかつて夢窓に参禅した経験もあり、「即心即仏」の語を拈提している様子がわかる²⁶⁾。能憲には『大慧書』を講じており、彼が禅籍にかなり造詣が深かったことがわかる。

また、年若い関東公方、足利氏満に対しては『貞観政要』を読むことを勧め、為政者として心構えを説いている。氏満には菅原豊長に『孝経』『政要』の講義を受け、諸寺長老からは、経典・語録の講義を受けるように指導している²⁷⁾。義堂の仏教と儒教の関係性を示す思想の表れでもある。

『日工集』のなかからは義堂の読書の内容や彼が講義や質問のために参照した書目もわかり、『太平広記』『釈子資鑑』『編年通論（隆興仏教編年通論）』、敬叟居簡の『北簡文集』『北簡詩集』『大宋僧伝』『広燈録』『仏祖心燈録』『性理指要』『宗鏡録』『事文類聚』等（19・28・29・34・36・50・60）の書名がみえる。

学解釈と鑑賞』第69巻6号、2004年）。

22) 『日工集』貞治6年4月26・27日条。

23) 『日工集』永和4年4月17～20日条。

24) 『日工集』応安3年正月9日条。

25) 『日工集』応安3年12月8日条。

26) 『日工集』永和5月9日条。

27) 『日工集』応安7年10月24日条。

表1 『空華日用工夫略集』にみる講義と読書

番号	西暦	年月日	書名・内容	活動	対象・場所	分類
1	1347	貞和3年	貞和集	執筆		詩文
2	1367	貞治6年2月19日	仏法繫年録	読書		仏教史書
3	1367	貞治6年11月5日	円覚経序	受講	寿福寺	經典
4	1367	貞治6年12月13日	中巖円月が清規(勅修百丈清規)を講ず	受講	建長寺	清規
5	1369	応安2年12月28日	皎然(雪峰義存)詩	講義		詩文
6	1369	応安2年5月7日	京の応藏主、孟子君を講ず	伝聞		儒教
7	1369	応安2年5月9日	楞嚴経第二	講義	上杉朝房	經典
8	1369	応安2年7月1日	孟蘭盆経疏	講義		經典
9	1369	応安2年9月2日	三体詩法	講義	僧衆	詩文
10	1369	応安2年10月18日	梁高僧伝	質問	中山法頼	僧伝
11	1369	応安2年11月28日	禪林類聚	刊行		公案
12	1369	応安2年12月23日	大慧書	講義	信州大井洒掃	語録
13	1370	応安3年正月13日	清規(勅修百丈清規)	講義依頼	建長寺	清規
14	1370	応安3年3月29日	梵網義記・四分律	講義	西門尼	戒律
15	1370	応安3年4月17日	大慧普覚禪師普説	講義	衆僧	語録
16	1370	応安3年4月20日	老杜詩・東山外集	講義依頼	曇瑛	詩文
17	1370	応安3年4月25日	華嚴五教章	受講	鎌倉浄光明寺	経疏
18	1370	応安3年6月10日	易経	質問	上杉憲春	五経
19	1370	応安3年6月10日	太平広記	質問回答	蔭首座	類書
20	1370	応安3年7月8日	孟蘭盆経疏を開講	講義	禪律徒衆	経疏
21	1370	応安3年8月6日	人天眼目	質問	九峰	宗義
22	1370	応安3年8月22日	楞伽経	読書		經典
23	1370	応安3年10月21日	大慧・雪竇など東山諸老語	対話	在中広衍・報国寺	語録
24	1370	応安3年12月8日	四皓・孟子	質問	二階堂行光	儒教
25	1371	応安4年正月8日	仏祖統紀	質問回答		仏教史
26	1371	応安4年正月8日	敬叟居簡・延慶経蔵記	読書		經典解説
27	1371	応安4年3月22日	東山集(雪峰慧空)	講義	諸子	詩文
28	1371	応安4年4月5日	釈子資鑑(歴代編年釈子通鑑)	質問回答	建長寺僧	仏教史
29	1371	応安4年4月20日	編年通論(隆興仏教編年通論)・北磻文集・石門文字禪	対談	建長寺僧	仏教史・詩文
30	1371	応安4年4月23日	東山集(雪峰慧空)	説法	衆僧	詩文
31	1371	応安4年6月3日	守亨書記、春秋左氏伝の講義の許可を請う	講義	衆僧	儒教
32	1371	応安4年7月1日	孟蘭盆経疏を開講	講義		経疏
33	1371	応安4年9月28日	円覚経	講義	衆僧	經典
34	1371	応安4年12月19日	大宋僧伝	読書		僧伝
35	1371	応安4年12月25日	百丈清規	対談	馬場居士	清規
36	1371	応安4年12月30日	天聖元燈録・仏祖心燈録・性理指要(朱晦菴)	対談		禪宗史・儒教
37	1372	応安5年正月26日	正法念処経	対談	依田居士	經典
38	1372	応安5年2月26日	貞観政要	講義	足利氏満	政治
39	1372	応安5年2月30日	夢窓国師年譜	講義	足利氏満	僧伝
40	1372	応安5年3月1日	輔教編(契崇)	講義	衆僧	仏儒
41	1372	応安5年5月28日	玉屑詩	読書		詩文
42	1372	応安5年7月3日	楞嚴経	対談	余俊道人	經典
43	1372	応安5年8月1日	統伝燈録	対談	円蔵主	禪宗史
44	1372	応安5年11月10日	保寧瓊伝(五燈会元カ)	読書		禪宗史
45	1373	応安6年正月15日	無文文集・貞観政要	講義	衆僧・足利氏満	詩文・政治
46	1373	応安6年3月26日	入衆清規	対談		清規
47	1373	応安6年4月1日	日用小清規	読書		清規
48	1373	応安6年5月3日	大慧書(大慧宗杲)	講義	上杉能憲	語録
49	1373	応安6年10月6日	仏祖統紀	質問	町野居士	仏教史
50	1373	応安6年11月1日	宗鏡録	読書		宗論
51	1373	応安6年12月1日	林間録	講義		宗義
52	1374	応安7年2月1日	宗鏡録・羅湖野録	読書・講義		宗論・宗義
53	1374	応安7年4月1日	坐禅儀	講義	周巖	清規
54	1374	応安7年4月1日	貞和集	講義	衆僧	詩文
55	1374	応安7年4月1日	鐔津文集(契嵩)	読書		文集
56	1374	応安7年6月29日	孟蘭盆経	講義		經典
57	1374	応安7年11月1日	吾妻鑑	読書		史書
58	1375	永和元年7月7日	林間録	講義	衆僧	公案

日本中世における禅僧の講義と室町文化（原田）

番号	西暦	年月日	書名・内容	活動	対象・場所	分類
59	1375	永和元年7月13日	貞観政要	講義	足利氏満	政治
60	1376	永和2年3月14日	事書類聚	読書		類書・詩文
61	1376	永和2年7月5日	楞嚴經	講義	東江	經典
62	1376	永和2年8月5日	鐔津文集（契嵩）	講義	上杉憲春	文集・宗論
63	1378	永和4年10月7日	養老集（寿親養老新書）	読書		生活
64	1378	永和4年12月6日	六臣註文選	贈呈	細川頼之	詩文
65	1379	康暦元年閏4月20日	秀芝田、法華合論の講義	受講		經典
66	1380	康暦2年6月10日	入衆日用清規	講義	妙夫藏主・斯波義将・建仁寺	清規
67	1380	康暦2年6月22日	円覚經疏	講義	僧衆・建仁寺	經典
68	1380	康暦2年7月3日	禅門宝訓	講義	斯波義将・義種	宗義
69	1380	康暦2年8月7日	中庸書	講義	足利義満・斯波義将・等持寺	儒教
70	1380	康暦2年8月24日	東山集（雪峰慧空）	講義	足利義満・斯波義将	詩文
71	1380	康暦2年8月26日	円覚經を講了	講義	僧衆・建仁寺	經典
72	1380	康暦2年9月21日	東山集（雪峰慧空）、25日まで	講義	僧衆・建仁寺	詩文
73	1380	康暦2年11月3日	円覚經、文珠一章	講義	斯波義将・管領邸	經典
74	1380	康暦2年11月7日	孟子を読むことを勧める	読書	足利義満	儒教
75	1380	康暦2年11月15日	円覚經	講義	足利義満・斯波義種・上府	經典
76	1380	康暦2年11月23日	日用小清規、26日まで	講義	衆僧	清規
77	1380	康暦2年11月晦日	中峰広録	講義	足利義満	語録
78	1380	康暦2年12月7日	坐禅儀	講義	僧衆・等持院	清規
79	1381	永徳元年5月16日	円覚經開講・毎日一章・12日間	講義	僧衆	經典
80	1381	永徳元年6月16日	金剛經	講義	足利義満室日野業子	經典
81	1381	永徳元年7月3日	孟蘭盆經疏	講義	僧衆・日野業子・足利満詮・京極	經典
82	1381	永徳元年7月25日	禅儀外文集（虎関師鍊）、10数日	講義	聴衆2000人	詩文
83	1381	永徳元年9月22日	足利義満、孟子の内容を聞く	対談	足利義満	儒教
84	1381	永徳元年9月27日	足利義満、孟子の内容を聞く	対談	足利義満	儒教
85	1381	永徳元年9月7日	足利義満、孟子の内容を聞く	対談	足利義満	儒教
86	1381	永徳元年11月22日	新刊科註法華經を受け取る	受贈	天境靈致の遺品	經典
87	1381	永徳元年11月28日	足利義満、孟子・六祖慧能・逆修・念仏の功德を聞く	対談	足利義満	儒教・僧伝
88	1381	永徳元年12月2日	足利義満、孟子について質問、倪子集註	対談	足利義満	儒教
89	1381	永徳元年12月3日	足利義満、周易・春秋左氏伝について質問	対談	足利義満	儒教
90	1381	永徳元年12月27日	四書の次第を略説	対談	足利義満	儒教
91	1382	永徳2年正月11日	金剛經四句偈・莊子	対談	斯波義将・土岐詮直・山名氏清	經典
92	1382	永徳2年正月19日	古尊宿録	受贈	雲門庵太清宗渭	語録
93	1382	永徳2年正月30日	達摩・大慧・無準など祖師の臨終	対談	足利義満	僧伝
94	1382	永徳2年2月18日	論語魯論・中庸・景德伝燈録・圓悟心要（圓悟克勤）等	講義・対談	足利義満	儒教・禅宗史
95	1382	永徳2年2月29日	輔教編（契崇）・中庸・元亨釈書	対談	足利義満	仏儒・儒教・仏教史
96	1382	永徳2年4月3日	隆興仏教編年通論	対談	空谷明応	仏教史
97	1382	永徳2年5月4日	趙州従諍の伝記・語録	対談	足利義満・斯波義将	語録
98	1382	永徳2年5月23日	中峰広録（中峰明本）	対談	斯波義将・義種	語録
99	1382	永徳2年6月1日	首楞嚴經疏序	講義	首座宗鏡湖	經典
100	1382	永徳2年6月19日	法華經藥王品	講義	足利義満・安聖寺	經典
101	1382	永徳2年6月20日	円覚經・公案	講義	足利義満	經典・公案
102	1382	永徳2年6月22日	大慧書（大慧宗杲）	講義	足利義満	語録
103	1382	永徳2年6月23日	首楞嚴經・道話	講義	足利義満	經典
104	1382	永徳2年7月3日	楞嚴經～7日	講義	足利義満	經典
105	1382	永徳2年7月8日	太清宗渭、円覚經、古劍妙快、大慧書	聴聞	足利義満	經典・語録
106	1382	永徳2年8月4日	楞嚴經	講義	足利義満	經典
107	1382	永徳2年8月14日	楞嚴經	講義	足利義満	經典
108	1382	永徳2年9月14日	無相（日野宣子）月忌、楞嚴經、太清宗渭は碧巖録	講義	足利義満	經典・語録
109	1382	永徳2年9月25日	無相百日忌、楞嚴經第5下	講義	足利義満	經典
110	1382	永徳2年11月14日	太清宗渭、碧巖録	聴聞	足利義満	語録

番号	西暦	年月日	書名・内容	活動	対象・場所	分類
111	1382	永徳2年12月14日	楞嚴經第5末	講義	足利義満	經典
112	1383	永徳3年3月7日	晋書殷浩伝をもって答える・円覚經	対談	足利義満・洪川幸子	史書
113	1383	永徳3年3月14日	円覚經・宗鏡録(永明延寿)	講義	足利義満・本光院尼長老	經典・宗論
114	1383	永徳3年4月13日	楞嚴經第五末	講義	足利義満	經典
115	1383	永徳3年4月22日	円覚經	講義	洪川幸子・下府	經典
116	1383	永徳3年4月22日	貞和集・北磻外集・六祖壇經	対談	太清宗渭・独芳清曇	詩文・語録
117	1383	永徳3年5月24日	詩学大成・礼記・陳澹新注(雲莊礼記集説)	対談	足利義満	詩文・儒教
118	1383	永徳3年7月14日	無相一品忌、楞嚴經觀音章	講義	室町殿	經典
119	1383	永徳3年7月20日	清規(勅修百丈清規カ)・8月27日・9月1日	講義	等持寺	清規
120	1383	永徳3年9月14日	無相一品忌、楞嚴經	講義	室町殿	經典
121	1384	至徳元年12月2日	穆庵文康語録	対談	太清宗渭・椿庭海寿	語録
122	1384	至徳元年12月10日	蔵叟摘藁(蔵叟善珍)	対談	汝霖妙佐	詩文集
123	1385	至徳2年正月9日	楞伽經	対談	椿庭海寿	經典
124	1385	至徳2年5月2日	勅修百丈清規開講	講義	僧衆	清規
125	1385	至徳2年5月13日	法華經提婆達多品	講義	洪川幸子・紀良子	經典
126	1385	至徳2年5月14日	無相一品忌、楞嚴經疏	講義	足利義満	經典
127	1385	至徳2年6月1日	清規	講義	僧衆・東福寺僧	清規
128	1385	至徳2年6月14日	楞嚴經・太清宗渭は碧巖録	講義	足利義満	經典・語録
129	1385	至徳2年7月12日	無相一品忌、楞嚴經疏	講義	足利義満	經典
130	1385	至徳2年9月20日	東山集(雪峰慧空)開講	講義	衆僧	詩文
131	1386	至徳3年3月14日	楞嚴經第7卷	講義	足利義満・鹿苑院	經典
132	1387	至徳3年4月25日	金剛經纂要(金剛般若經疏論纂要)開講	講義	衆僧	經典
133	1387	嘉慶元年10月14日	首楞嚴經疏第七卷下・大慧法語(大慧宗杲)	講義	足利義満・斯波義将・義種	經典・語録
134	1387	嘉慶元年12月5日	大慧録(大慧宗杲)	質問	足利義満	語録
135	1388	嘉慶2年2月12日	貞和集重編	著述		詩文

また、元の大徳11年(1307)に刊行された諸祖師の言行の集成である『禪林類聚』を鎌倉で刊行し(11)、中国福州出身の活字工も義堂のもとに出入りしており²⁸⁾、大陸の知識情報を日本で発信する役割もはたしていた。

このように、義堂は鎌倉の地において僧衆はもとより関東公方周辺の要人への影響力は大きく、学識深い彼を恃んで、多くの人々が訪れた。鎌倉時代末からの伝統もあるが、鎌倉を中心とした関東において、禅僧のもつ大陸の最新の知識は確実に浸透し、様々な典籍が縦横に用いられたのである。

東国鎌倉の武士たちは禅宗に関心も深く公案をもとにした坐禅工夫に励むものもあり、禅僧・禅宗寺院をとおして僧侶の逸話や禅林の中国風の生活、さらに儒教の情報まで入手していた。

1379年(康暦元)、京都の政局が大きく変動して、管領細川頼之は失脚、足利義満が実権を掌握して斯波義将が新たに管領に就任した。これより先、関東管領足利氏満は義満に反旗を翻そうとして、上杉憲春はこれを諫めて自害している。

宗教界でも、細川頼之と対立していた春屋妙葩が復権し、京都五山の総帥的立場となった。これ以前、禅宗の台頭を指弾するため延暦寺を中心とした康永・応安の山門嗾訴が起こったが、その折に、細川頼之は顕密諸宗に妥協的であり、春屋妙葩と対立していた。その春屋が復権し巻き返しを図るのである。

義堂の身辺も慌ただしいものとなり、春屋の命で、鎌倉から京都にもどるよう働きかけがあった。春屋は足利義満を動かし、義堂は建仁寺住持として招聘された。義堂は辞退の意向であったが、1380(康

28) 『日工集』 応安3年9月22日条。

暦2) 上洛し、辞意は認められず建仁寺に入った。これ以降、義堂は義満の信任を得て、春屋等とともに五山の有力僧の一員として将軍に常日頃、近侍するようになる。義堂の学識はここにおいても発揮され、義満をはじめ有力守護大名層、公家たちへも影響を及ぼしていく。

義堂は早速、管領斯波義将と弟、義種のために『禅門(林)宝訓』を講じている(68)。この書は大慧宗杲と竹庵士圭が燈史や諸語録から学人の模範となる事例を集成したもので、後に浄善が増補した。こうした中国歴代の禅僧の事績について室町幕府の諸将が関心を持ち彼らの教養のなかに取り入れていったことは注目される。

義堂の講義活動は活発で、經典関係では禅宗が重んじた『円覚経』『金剛経』『孟蘭盆経疏』『首楞嚴経疏序』『法華経薬王品』『楞嚴経』『金剛経纂要』(67・71・72・75・80・81・82・99・100・101・103・104・106・111・113・114・115・123・125・128・131・132・133)。

詩文集・語録では『東山集(雪峰慧空)』『禅儀外文集(虎関師鍊)』『中峯広録』(70・72・77)。清規関係では『日用清規』『坐禅儀』『勅修百丈清規』(76・78・119・124)。儒教では『中庸』『論語』(69・94)などを講じている。

対談で参照・引用される書目は禅宗史書である『景德伝燈録』、語録の『圓悟心要(圓悟克勤)』『趙州録(趙州従諗)』『穆庵文康語録』、儒教と仏教を論じた『輔教編』、日本の仏教史書『元亨釈書』、中国の仏教史書『隆興仏教編年通論』、儒教では『礼記』『孟子』などがある。

京都での活動は、鎌倉滞在時期に比べると經典類の講義が増加して、講義や対談はより活発化している。虎関師鍊の編著で、中国の禅僧の疏・楞・祭文を集め四六駢儷文の模範を示す『禅儀外文集』を1381年(永徳元)に講じた折には、聴衆二千人といわれ(82)、講義の規模の大きさを知ることができる。この頃、京都五山の一カ寺あたり五百人から七百人の禅僧がいた時代であるから、その影響力は大きかった。

こうした僧侶以外の講義や対談の相手は、足利義満をはじめ、義満の夫人日野業子、管領斯波義将・斯波義種・土岐頼康・土岐詮直・山名氏清など有力守護大名や側近が同席することが多かった。義堂の記す人物以外の奉行人・近習などの列席は想定されるし、義堂と足利義満や幕府要人との対談も小規模な講義ともいえる。

講義は僧侶問わず聴聞している場合も多く、こうした講義は義堂だけではなく、太清宗涓が「碧巖録」を講じたりもしており、室町殿周辺では複数の禅僧による活発な講義が繰り広げられていた。この他の五山系寺院でも講義は催されたであろうし、洛中洛外では数多くのこうした講義が行われたのである。

經典の講義のなかでも「道話」の語も見え、經典解釈のなかで禅語録の内容や禅僧の逸話が語られ、禅宗を中心とした中国仏教の知識が政権の中枢部にいる人々に確実に浸透していったことがうかがえる²⁹⁾。

義満は建仁寺・南禅寺などにおもむき先にふれた乗払の儀式なども聴聞し、実際の禅問答にふれている³⁰⁾。禅問答における棒喝の所作に喜んだりして浅薄な雰囲気もみうけられるが、義満自身この時期、

29) 『日工集』永徳2年6月23日・7月7日条等。

30) 『日工集』永徳2年11月10日条等。

禅宗にずいぶん関心を持った時期である。

義満の信仰や宗教政策が禅宗一辺倒ではなかったことは確かであるが、少なくとも義堂や春屋が在世中は禅僧との交流はきわめて密であった。義満自身、西芳寺で坐禅を組むこともあり、無字の公案を夢にまで見たり、「趙州狗子」「独坐大雄峰」「祖師西来意」「庭前柏樹子」などの公案を話題にしていることなどは³¹⁾、彼の禅理解を皮相なものとするわけにはいかず、この時代の上層武家のなかでは一般的な知識としてこうした禅語録や禅僧の逸話が理解されていたことは注目される。

儒書については講義は比較的少ないものの、義堂は義満に『孟子』を読むことを勧め、義満は盛んに儒教に関することも質問している。義満との対談のなかでは、義堂が四書の概要を説いたりして、儒教の内容を教えていることなどが注目される。義堂は幕府要人たちにとって仏教・儒教ともにその師として仰がれていた。

以上、義堂を例にとって中国典籍の受容の在り方、それを用いての講義による禅宗・儒教・中国事情の紹介の実態を検討してきた。禅僧の活発な中国典籍の読書と講義による知識の宣布は日本中世において突出したものであり、文化交渉の最先端を担っていたことがわかる。

また、禅宗をはじめとした中国仏教の様々な情報がこの時期かなりの濃度で武家上層部に浸透していたことがわかり、儒教もその一端であった。

それでは、こうした義堂に代表される禅僧の思想は日本社会にどのような意味を持ったのであろうか。仏教・儒教という二大思想の日本における紹介の在り方、また、唐・宋・元の仏教界の動向、禅僧の言説が如何なる形で日本社会に影響を及ぼしていくのかを次章で検討していきたい。

三 禅宗の特色と社会への広がり

前章で見てきたように、義堂は禅僧として大陸の仏法を宣揚するとともに儒教思想や詩文にもきわめて明るく、禅僧の逸話や大陸の仏教寺院の在り方まで含めて日本社会に発信していった。

こうした大陸情報の伝達者は何も義堂だけではなく、夢窓疎石、春屋妙葩をはじめ他の五山僧においても同様の在り方がみられ、事実、関東・京都においても夢窓派の影響力は大きかった。鎌倉時代後期の渡来僧たちもまた、大きな影響力を持ったが、日本語の制約はあり、何といても詳細な中国情報・知識の導入は中国に留学した禅僧、また彼らの情報を共有することができる五山僧が主導するところであった。その意味でも、14世紀は五山の整備が進み拡大し、大陸の情報が大量に発信され日本社会に受容されていった時代であった。

中国の思想がどのような形で日本社会に展開していくのか、まず、義堂の活動にみる仏教と儒教の関係性を中心に検討していきたい。これまで、義堂の詩文の才や儒学の知識は注目されてきたが、先にみえてきたように講義や知識の幅は広範でその全体像が解明されているとは言い難い。台頭していく禅宗にとってこうした講義の内容は如何なる意味を持つのか、また、社会のなかで禅僧は如何なる役割を期待され、支持を受けていったのかも含めて考えていきたい。

31) 『日工集』永徳元年正月7日・永徳2年5月4日条。

義堂の儒学に対する立場は、為政者たちに対しては儒学の知識を持ち治世に役立てることを勧め、彼らからの儒学にかかわる質問にも積極的に答えている。しかし、禅僧たちが儒教に親しみ、本来の禅宗・仏教の修学がおろそかになることに危機感を抱き、儒学の講義の制限をしていたようで、守亨書記は諸少年僧に『左氏伝』を講ずることの許可を求めており、義堂は孔孟の書も仏法の一助としてこの場合は認めている（31）。

また、常陸国で盛んに儒教を講ずる資中という僧のもとに多くの禅僧が集まり邪見を起こさせることを憂えて、守護佐竹義宣に禅僧の受講を禁じるよう要請している³²⁾。15世紀の五山では儒教典籍を主として講ずる禅僧が増加していくが、義堂の段階では先にみたように儒教の講義を制約したものであり、仏教と儒教のバランスを考えたものとなっている。

また、鎌倉において儒教を講じた菅原長方は義堂に弟子の礼を取り受衣している。義堂の言によれば「儒釈皆以悟為宗」³³⁾ というもので、儒教と仏教の立場の同一性を説くとともに、受衣という在り方からも禅僧の優位を示している。

京都における活動のなかでも、足利義満は儒教について、清原良賢や菅原秀長などの講義を聞いているが、しばしば義堂に対して儒典の内容を聞く場合があり、これによく答えている。

義堂は儒学にも造詣は深く、最新の宋学の知識も大陸からの書物でよく知っており、儒学史のなかでも義堂は一定度評価されている³⁴⁾。義堂は義満に『孟子』を学ぶことを勧め、求められれば儒教に関する講義も行った（74・94）。もっとも、義堂は禅僧たちが仏法を学ばず、儒教に心奪われることを快く思わず、折に触れてこの傾向を戒めている。

仏教と儒教の関係はしばしば問題となり、例えば『日工集』永徳元年9月25日には義満は義堂に対して『孟子』のなかの一節を質問し、義堂は儒釈の同異差別を説いている。同2年2月25日には、義満は儒者の講義を聴いた後の疑問を義堂に質問し、義堂は『輔教編』を引きながらこれに答えている。その中で五常と五戒の義は同一と説き、仏教は儒教を兼ね得、儒教は仏教を兼ね得ずと結論づけている。

このあたりのやり取りは、従来儒学史研究のなかでも取り上げられているが、禅僧が儒教から仏教に義満を導いていると単に評価されたり、禅宗側も宋学の提唱を禅法挙用の方便として使っているとの見解もあるが、義堂の講義や儒教とのかかわりを見ると、治世は儒教をもってし、治心は仏教といった役割分担の考えが根底にあり、「宋朝以来学者皆参吾禅宗、一分發明心地、故註書与章句学迥然別矣」³⁵⁾ と宋代以来、学者は参禅し、一分の悟りを得ることにより註と章句の別がはっきりしたとしている。朱子の新注の優位を評価するとともに朱子が大慧宗杲の『大慧書』を高く評価したとして、儒教への禅宗の影響の大きさを主張している。このあたりは、義堂の読書歴のなかで度々ふれた契嵩の『輔教編』の影響が色濃いといえよう。義堂は『輔教編』の内容をまさに実践していたのである。

このように禅僧が儒教を積極的にその内部に位置づけるのは、為政者たちの治世の法への関心に答え

32) 『日工集』 応安6年3月19日・永和元年7月8日条。

33) 『日工集』 康暦2年正月20日条。

34) 註2参照。

35) 『日工集』 永徳元年9月22日条。

るとともに、当時禅宗が中世仏教界の主流であった顕密諸宗からの批判に答えるものでもあった。

この時期の顕密諸宗と禅宗の対立点については別にふれたことがあるが³⁶⁾、顕密諸宗側から南宋の滅亡をもって禅宗は亡国の教えであるとの批判もあり、また、日本で古代以来、鎮護国家を標榜して国家的仏事法会を主催していた顕密諸宗に対抗するためには、治国の原理を説く儒教こそ重要な要素であった。

国家による仏教弾圧や儒仏の深刻な抗争がない日本社会において、禅僧たちが積極的に仏教と儒教の関係性を説いたのは、顕密諸宗との対抗のなかで、治国と治心を兼ね備えた仏法として禅宗を意味づけるためであった。

禅僧の儒教に対する関心と積極的な紹介は単なる大陸の思想状況の紹介ではなく、日本の中世社会における積極的意味合いがあったのである。こうしてみれば、義堂の思想とその実践の歴史的意義が了解されるのである。中国思想が単純に日本社会に流入していくのではなく、受け取る日本側にも受容する積極的な意義が存在していたのである。これにより仏教と儒教の関係性も日本独特の形態となっていくのである。

次に、燈史や語録に説かれる禅僧の言行は如何なる形で日本の文化に受容されていったのかを検討していきたい。南北朝・室町時代の文化は現在に至る日本文化の基礎を形成した時期ともされるが、具体的に大陸仏教の影響をみていきたい。

そこで注目したいのは能の世界への禅宗の影響である。これまでも世阿弥や禅竹といった室町時代の代表的な芸能者への影響は語られたことはあったが、より謡曲の内容にまで踏み込みその影響の広がりを見てみたい。能が著しく芸術としての完成度を高めたのは観阿弥(1333~84)・世阿弥(1363~1443?)の時代であり、これは足利義満や義堂の生きた時代と重なる。

能のなかには様々な禅語が用いられ、単なる演出上の言葉遊び的要素もあるが、演目のなかには禅の見解が重要な場面で示されているものもある。「放下僧」³⁷⁾のなかでは巷間で禅問答を交わす武士の姿が登場し、在俗の武士がもつ禅思想の知識の豊富さを示している。「卒都婆小町」³⁸⁾では禅宗六祖慧能の語が重要な役割をもつ。「桜川」³⁹⁾のなかでは「碧巖録」の「山花開けて錦に似たり…」の語が引かれている。『碧巖録』は人気があったとみえ、「春日明神」「放下僧」「嵐山」にも引用の語がみえる⁴⁰⁾。また、「放下僧」には『楞嚴経』からの語も引かれている。

能がこの時代、公武の上層をはじめ、洛中洛外、地方寺社の境内など広範な広がりを見せていたことは周知のことであるが、能作者が積極的に禅語を台本に入れ、観客も一定程度その内容を理解していた事実は重要である。先の義堂周辺の武士たちが盛んに公案の一節を暗誦して質問をしたり、禅僧の講義によって燈史に出てくる禅僧の逸話や問答の内容を聞きかじりも含め知っていたことは事実であり、講義

36) 註1参照。

37) 『岩波日本古典文学大系 謡曲集』下、「放下僧」については註1拙著参照。

38) 『日本古典文学大系 謡曲集』上、註21拙著参照。

39) 『新潮日本古典集成 謡曲集』中。

40) 『新潮日本古典集成 謡曲集』上、『日本古典文学大系 謡曲集』上下、尚、室町仏教全体と芸能の関係については拙稿「室町仏教と芸能・談義」(『芸能史研究』183号、2009年)参照。

の影響によって南北朝・室町時代前期の人々が禅宗を通して中国仏教の知識を共有していたのである。

また、禅語が能に採り入れられることによりさらに広範な階層の人々がこうした禅語を聞き知ったのである。義堂のような五山の頂点にいる人物だけではなく、地方禅院でもレベルの差はあるとはいえ講義や説法、問答が行われたのであり禅思想の広がりには想像以上に大きかったといえよう。

おわりに

以上、日本の中世において大陸との文化交渉のなかで重要な役割を持った禅僧たちの講義とその影響を明らかにしてきた。京都鎌倉の五山をはじめとした禅寺は膨大な大陸からの典籍を所蔵し、禅宗のみならず天台・儒教をはじめとした諸宗・諸思想の書目を備えていた。規模の大小はあるとはいえ地方の十刹・諸山といった拠点寺院でも同様の蔵書もあったであろうし、大陸文化は禅僧の活動によって日本の各地方にまで広がった。

義堂に代表されるように禅僧たちは大陸からの典籍を手元に大量に所蔵し、折に触れこれを活用して講義や説法を行った。足利基氏・氏満・上杉能憲・足利義満・斯波義将などの行動に見るように禅僧との交流は自らの宗教的欲求を満たすものと同時に治世の方策を学ぶ場でもあった。

14世紀の日本社会において、禅宗は顕密諸宗との軋轢が大きくなり、これを乗り越えなければならない段階であった。古代以来の顕密諸宗は国家的仏事法会を担い鎮護国家を標榜していたが、禅宗もまた大陸風の祝聖など祈禱をはじめとした仏事法会を展開するとともに治世の学としての儒教を併せもつことでこれと対抗したのであった。仏教優位のもとでの儒教との一致を説くことによって、禅宗は為政者に受容されていった。

また、禅僧の講義はその言説をより広範に広げ、能といった芸能の中にまで影響を及ぼした。武家公家を問わず禅僧の講義の影響は大きく、受容層は厚みを増し、芸能者も時代の新しい風潮として禅宗の思想を能のなかに採り入れていった。燈史や語録の中に出てくる中国の禅僧の言行は、人口に膾炙し、仏法を説く重要な言葉として展開していった。難解と思われる禅語がこうして社会の隅々にまで広がっていくのである。

この時代、大陸の思想はその周辺地域で新たな意味合いを持ち、新しい思想・文化の動きを引き起こしていったのである。本稿は東アジアにおける文化交渉の実態を日本中世の禅僧の読書と講義といった一つの切り口から明らかにしようとした試みである。

